

異世界でのおれへの評価がおかしいんだが

ゝ新婚旅行は波乱万丈でしたゝ

フリクス

黒翼騎士団の副団長。
冷静沈着な美麗の貴公子。
タクミを愛するあまり
しばしば我を忘れる。

カセル

黒翼騎士団の団長。
カリスマ性のある
ワイルドなイケメン。
溢れる包容力で
タクミを愛する。

タクミ

RPGゲーム「チェンジ・サ・ワールド」の
世界に転移してしまった主人公。
黒翼騎士団の一員として活躍している。
元の世界には帰らず
この世界でカセルとフリクスと
共に生きていくことを決めた。

ハルトウス

リッツハイムの領海を
守護する青翼騎士団の団長。
糸目の陽気なお兄さん。

リド

タクミたちが旅行の途中で
出会った青年。
故郷の町がおかれた
苦境について領主に訴えるため
ゴルエラ市に向かっている。

ゴルエラ領主

ゴルエラ市の領主。公明正大な人物だったが
最近、人が変わったような振る舞いをしてるらしい。



「——ふむ？」

おれは鏡に映る自分の姿を見つめた。

そこに映っているのは、黒髪黒目の人間だ。さほど特徴もない平坦な顔立ちの人物が、小首を傾げてこちらを見つめ返している。

普段ならばそれでなんの問題もないのだが——

今、鏡に映っているのは、おれの実年齢から五、六年ほど前の姿だ。

どういうわけか、若返った自分の姿なのである。

「え、えーつと……？　ちょ、ちよつと待つて。ちよつと状況を整理してみよう、うん」

鏡に映る自分の姿から顔を背けて、こめかみを押さえる。

そう——事の始まりは、ちょうど一ヶ月前のことだ。



「——旅行？」

「ええ、そうです。国内で問題になっていたモンスター的大量発生も収まりましたし……タクミはこの世界に来てから、リッツハイム市の外に出たことがほとんどないでしょう？　よければ、三人で旅行にでも行きませんか？」

『この世界に来てから』というのは——おれは元々、この世界の人間ではないからだ。

おれは日本という国に住むただの平凡な学生、なんの変哲もない一般人だったのだが——ある日突然、この異世界に来てしまったのである。

しかも、ここはただの異世界ではなかった。おれが元いた世界で遊んでいたRPG『チェンジ・ザ・ワールド』の世界だった。

ゲームの世界に突然来てしまったおれだが、幸いにも、そこで出会った人々に助けられ、この世界でなんとか生きている。

そして、すぐそばにいる——おれの右隣でポットからティーカップに紅茶を注いでいる男性、フェリクスもその一人だ。

三つのカップに紅茶を注いだ彼は、そのうちの一つをおれに手渡した。

「ありがとう、フェリクス。それにしても、旅行か……もちろん行ってみたいが、ガゼルとフェリクスは、あまり長くは黒翼騎士団を離れられないだろ？」

「一週間程度ならば大丈夫ですよ。さっきも言った通り、モンスターの発生もぐんと減りましたし……なにより、たまには羽休めも必要ですよ。私にも、貴方にも」

薔薇の薔がほころぶような微笑み。

フェリクスは片手をおれの右手に重ねると、その指先でそっと手の甲をなぞってきた。

表情からも、触れ方からも、こちらに對するフェリクスの愛情がこれでもかと伝わってきて、めちゃくちゃ恥ずかしくなる。

あ、相変わらずのイケメンっぷりだぜ、フェリクス……！

彼との付き合いは一年以上、しかも、去年の冬からこの家で同棲している身であるけれど……いつまで経ってもこういう扱いに慣れない。っていうか、慣れる気が全然しない！

——フェリクス・フォンツ・アルファレッタ。

彼は、おれの所属する黒翼騎士団の副団長を務めている人物だ。

さらさらの金髪と紫水晶色の瞳を持つ、まるで白馬の王子様を体現したようなイケメンである。

というか、実際に名のある伯爵家の三男なので、王子様とまではいかなくとも、れっきとした貴族のご子息なんだけれど。

フェリクスに微笑みを向けられ、あわわしているのと、不意に頭をくしゃりと撫でられた。

その大きな掌は、おれの左隣から伸びてきたものだ。

「そんなに心配しなくても大丈夫だぜ、タクミ。黒翼騎士団には続々と新入団員が入ってきて、後進も育ってきてるしな。俺らがいなくても、何も問題はねえよ。むしろ、俺やフェリクスがいないうが羽が伸ばせるから、皆、喜ぶかもな！」

白い歯を見せてにかりと笑ったのは、おれの左隣に座っていたガゼルだ。

彼の名前は、ガゼル・リスティーニ。

黒翼騎士団の団長を務める、おれとフェリクスの上司にあたる人物だ。

ワインレッドの髪と金色の瞳、陽によくやけた筋肉質の身体を持つ、フェリクスとはまた方向性の違う精悍なイケメンである。

そんなガゼルの笑顔や言葉には、無条件で人を安心させるエネルギーがある。その力に、おれはこの世界で幾度となく助けられた。

なので今回も、ガゼルのその言葉だけで、おれの心は「ガゼルがそう言ってくれるなら行っちゃおうかな！ たまにはいいよね！ 旅行なんて、この世界じゃ初めてだし楽しみなー！」という方向にあっさりひっくり返る。

しかし、そこまで考えて、おれはふと気になった。

……一週間、黒翼騎士団を留守にする間……つまり一般人風に言うなら、その間、会社をお休みするわけだけれど……ゆ、有給休暇とかは使えるのかな？

っていうか、この国——リッツハイム魔導王国には有給休暇制度はあるのだろうか？

どうしよう。一度考えたら、どうしてもそのことが気になってしまう。

今、おれはこの屋敷でガゼルとフェリクスと暮らしているから、お金に不自由しているわけじゃないけれど、将来を見据えて貯蓄とかしておきたいじゃん？

それに、このすごいお屋敷の購入代金も、おれは一円も出してないんだよ……ガゼルもフェリクスも「気にしないでもいい」って言うってくれたけど、三人で住んでるんだし、おれだって自分の住

んでる分くらいはちゃんと払いたい。

そんなことを考えていたら、がぜん、この世界に、ひいては黒翼騎士団に有給休暇制度があるのか気になってきた。

うーん、でもガゼルとフェリクスにはさすがに聞きづらいな……二人はおれの恋人ではあるけれど、同時に上司でもあるわけだし。明日、騎士団に行ったらイーリスにでも聞いてみようか。

「タクミ、なにか気になることもあるのか？」

そんなことを考えていたら、ガゼルがおれの顔を覗き込んできた。

金色の瞳に間近に見つめられて、どきりと心臓が跳ねる。

ちよつ、ちよつとガゼルさん！

いきなりそんなに至近距離に來られると心臓に悪いぜ……！！

いや本当、ガゼルとフェリクスの二人と正式に恋人同士になつてずいぶん経つけれど、ぜんぜん慣れないなあ……

「なにか心配事があるなら、遠慮はいらねえからなんでも言つてくれよ」

「いや、その、別にたいしたことじゃないんだが……」

紅茶のカップをテーブルに置き、ガゼルからそつと視線を逸らす。

口ごもるおれを、ガゼルがじつと見つめてくる。その真摯な顔に、ますます言葉が出てこなくなる。

ど、どうしよう……この状況で「旅行の間つて有給申請できる？」つてすごい聞きづらい……！

ああ、もう、おれの馬鹿！ 聞くら最初にさらつと質問しちゃえばよかったのに！

変に口ごもつたせいで、余計に言いづらくなつたじゃん！

「その、実は……」

「——ああ、もしかして、お前の髪と目のことか？」

……………へっ？

「確かに、騎士団の奴らや、この城下町にいる人間は、お前を見てももう騒ぐことはないけどよ、よその町に行つたらそうはいかねえもんな」

「……騒ぐ？」

「旅行先で、お前の黒髪黒目の容姿を見た連中が騒ぎ出したら、ゆつくり楽しめねえって話だろ？」

そう言つて、うんうんと頷くガゼル。

おれは、そんな彼の言葉に全力で乗つかることにした。

「あ——ああ！ そうなんだよ、実はそれが心配だつたんだ。おれの黒髪黒目は、このリッツハイム魔導王国じゃ珍しいんだろう？ 自意識過剰かもしれないが、それで、その、旅行先で変に人目を集めたら嫌だなあと！」

背中に冷や汗をかきながら、あせあせと早口で応える。

すると、反対隣に座つていたフェリクスが気遣わしげな表情を浮かべて、いたわるようにおれの背中に手を添えた。

「そうか……そうですね、タクミの不安に気付かず、誠に申し訳ございません」

「い、いや。別に不安とかじゃないんだ。ただ、その、それで注目されたらせっかくの旅行が楽しいめないかなーと」

「いえ、貴方の危惧はもつとものです。……心細く思う貴方に気付かず、一人浮かれていた我が身をお許ください」

まるで叱られたゴールデンレトリバーのごとく、しょんぼりと肩を落とすフェリクス。

その表情に、おれの罪悪感メーターは振り切れた。

ご、ごめん、フェリクス！

そんな顔をさせたかったわけじゃないんだ……！

っていうか、おれ自身も『リッツハイム魔導王国には異世界転移者しか黒髪黒目の人間はいないから、ものすごく珍しい』なんて話、ガゼルに言われるまですっかり忘れてたし！

おれはただ黒翼騎士団に有給休暇制度があるのか聞きたかっただけなんだ……！

でも、団長と副団長であるガゼルとフェリクスにはさすがに言いづらかったから、ガゼルの勘違いに乗っただけなんだ……！

「なるほど、旅先じゃどんな人間がいるかも分からんしな。もちろん行く場所は治安のいい町を選ぶつもりだが、どんな町にも悪巧みをする連中はいる。前に、タクミを誘拐したオッドレイとかな」

「まあ、あれはかなり特殊なケースだと思うが……」

オッドレイというのは、黒髪黒目の容姿の人間に執着するあまり、異世界転移の儀式を実行し、

新たな転移者をこの世界に呼び込んだ挙句、おれを誘拐した男の名前だ。

黒髪黒目ってだけで誘拐されるとは思わなかったから、あの時は本当にビックリした。でも、あんな人はそうそう世の中にいないと思う。そう信じてたい。

「まあ安心しろ、タクミ。お前が旅行先で窮屈な思いをしないよう、俺とフェリクスが対策を考えておくからな。目途がついたら、また改めて言うぜ」

そう言っ、ガゼルがまたもおれの頭をくしゃくしゃとかき混ぜた。

ごつごつとした節くれだったガゼルの指で頭を撫でられるのはけっこう好きだ。特にソファの上でそうされると、なんかこう、自分が飼い猫にでもなったような気分になる。

「ありがとう、ガゼル。……いつもいつもガゼルとフェリクスに任せきりにしてすまないな。おれにもできることがあったら、なんでも言ってくれ」

「いいんだよ。お前のためにあれこれ準備するのが、俺はいつとう楽しいんだぜ？」

ガゼルが唇を弧の形にすると、再びおれに顔を寄せてきた。そして、前髪をかき分けて額にちゅつと口づけをする。瞬間、思わずぴくりと肩が震える。

う、うおお……こういうスキンシップもいまだに慣れないぜ……！！

「タクミ。私も、貴方が旅行先で心置きなく楽しめるように、身命を賭して準備させていただきますから！」

「あ、ああ。……いや、別に身命は賭さなくてもいいからな、フェリクス？」

今度はフェリクスがおれの手を握りしめ、ぐつと顔を寄せてきた。

アメジストの瞳を縁取る金色の睫毛に、すつと通った鼻梁と、染み一つない肌。そんなフェリクス
の整った容姿を見ていたら、さっきの自分の言葉がとんだ道化に思えてきた。

……あれ？ どう考えても、旅行先で注目されるのはおれじゃなくて、ガゼルとフェリクスじゃ
ない？

よく考えたら、こんなイケメン二人とおれが歩いてても、誰もおれなんか気にしないだろう。

せいぜい、「あら、黒髪黒目の人間なんて珍しいわね。そんなどうでもいいことより、一緒にい
る美形のお二人は誰なのかしら……」程度の認識じゃないだろうか。

自分の自意識過剰っぷりが途端に恥ずかしくなる。

だが、フェリクスはそんなおれの手を恭しく掲げると、その手の甲に静かに唇を寄せて口づけた。
「いえ、今回の旅行は特に大事なものですから、貴方に心置きなく楽しんでいただきたいです」
「大事？」

「だいぶ遅くなりましたが……ほら。この旅行は、私たち三人にとって、いわゆる新婚旅行にあた
るわけですから」

そう言っ、につこりと笑うフェリクス。

その言葉と表情に、今度こそ自分の頬が熱くなった。

し、新婚旅行、とな……!?

そ、そっか……でも言われてみれば、そうだね……おれとガゼルとフェリクスは、正式にリッ
ツハイム市に婚姻届を出した関係であるわけだし、こうやってお揃いの指輪だつてつけてるし……

そ、そっかあ。新婚旅行か……

……ますます有給休暇の話とかしづらくなっちゃったな！



「……………」

一ヶ月前、ガゼルとフェリクスが旅行の話をしてくれたことを思い返していたおれは——自分の
至らなさをありありと思い出し、ちよつと自己嫌悪に陥ってしまった。

思わず、鏡の前でガツクリと項垂れる。

ちなみに有給休暇制度はちゃんと存在していた。黒翼騎士団がホワイト企業でよかったよ！
時たま命の危機にさらされる職場だけだね！

まあ、有給休暇の件はさておくとして。

「ええと……その後は、ガゼルとフェリクスが、姿を変える魔法薬を調達してきてくれたんだよな。
それで、『十日間だけ髪と目の色を変える薬』だつていうそれをこうやって飲んでみたわけだけ
ど……」

おれはもう一度、自分の姿を鏡で見てみる。

……先ほど聞いた話では、ガゼルとフェリクスが持ってきてくれた魔法薬は、おれの目と髪の色
を明るい茶色に変えるもののはずだ。

でも、どう見ても鏡に映る自分の姿は、黒髪黒目のままだ。

っていうか、自分の過去の姿だ。

この姿だと……実際の自分より五、六年ほど若返っているのか……？

「な、なんでこんなことに!? もしかして、用法用量を誤って飲んだとかか? 本当は食間に服用すべきだったのか?」

慌てて、洗面台に置いた魔法薬の空瓶を手にとって見てみる。

しかし、ガラス瓶には何も記載されていない。

っていうか、そもそもラベルの類はなにもない。

うーん……？

ガゼルとフェリクスからは、この薬をひと瓶飲み干せばいい、としか聞いてなかったけどなあ。もしかして、おれが「せっかく目と髪の色が変わるなら、髪の手が銀髪で目の色がオッドアイみたいな、強キャラ感溢れる感じのカラーリングがよかったな〜!」とか、中二病っぽい邪念を抱いていたのがよくなかったんだろうか……

「――タクミ、どうだ? 大丈夫そうか?」

聞こえてきた声にはつと顔を上げる。

ガゼルとフェリクスは今、応接間でおれが来るのを待っている最中なのだ。おれは、服用後の自分の変化を見るために、魔法薬を持って風呂場に隣接するユーティリティルームにいる。

おれが戻るのが遅いからだろう。応接間から響いてきたガゼルの声は、いささか心配そうだった。

「大丈夫だ、すぐ行くから待っていてくれ」

ガゼルに心配をかけまいと、反射的にそう返事をした。

が、どう考えてもあんまり大丈夫ではない。

「……でも、まあ、もしかするとこのあとに髪と目の色が変わるかもしれないし……身体も元に戻るのかもしれないし……」

あまつたシャツの袖と、ズボンの裾をくるくると折り返しながら、そう独りごちる。

うんうん、おれが知らなかっただけで、もしかすると魔法薬つてもともしう副作用があるのかもしれないしな!

いったん幼い姿になってから、髪と目の色が変わる……みたいな!

花粉症の薬だって、副作用で眠くなるやつとかあるし。姿が昔のものになっちゃうとか、意外とありふれた副作用なのかもしれない。

どのみち、いつまでも鏡の前でぼーっとしてるわけにもいかない。

旅行の出発は、いよいよ明日なんだ。今日は準備しなきゃいけないことがたくさんある。

「よーし! なら、ガゼルとフェリクスにちよっくらお披露目してくるか!」



「……………」

「……………」

意気揚々と応接間に戻ったおれを出迎えたのは、しかし、ガゼルとフェリクスの絶句だった。

あー……そうだよ。やつぱりそうなるよね……

「……………え？ あ、あの、タクミ、ですよ……？」

「い——いや、ちょっと待ってください。なんだ、それ？ いったいどういうわけだ？」

しばらく沈黙が続いたあとに、二人が戸惑いと驚きに満ちた顔で、恐る恐る尋ねてきた。

二人とも、応接間の扉の前に立つおれを、頭の上から爪先までジロジロと見つめてくる。

そんな彼らの様子に、おれは顎に手を当ててふむふむと頷いた。

「やつぱり、この姿は二人にとっても想定外なんだな。てっきり、魔法薬っていうのはすべてこういうものかと思った」

「な、何故そんなに落ち着いていられるのですか!？」

「いやいや。タクミ、もっとなにかこう……驚いたりとか、パニックになったりとかしねエのかわよ？」

いやー、そりゃ最初はおれもめちゃくちゃビックリしたよ。

さっき、一人きりで今の自分の姿を見た時は、かなりパニックになったし。

でも、二人がおれの予想以上に驚いてるもんだから、逆に冷静になったというか。

「むろん驚いている。最初は、魔法薬の副作用なのかと思っていたのだが……二人の反応を見る限り、そういうわけではなさそうだな」

「だからなんでそんな落ち着いてるんだよ？」

「タクミはよくそこまで冷静でいられますね……？」

戸惑いからいまだに抜け出せないといった表情の二人。

うーむ……おれがこの姿になったのが、二人にとつて想定外の事態となると……おれが飲み方を間違えたか、もしくは、薬のほうになにか問題があったのか？

「おれが服用方法を間違えたのか？」

「いや、んなことはねエ。ただ飲めばいいだけの代物だ……くそつ、こうしちゃいらねエ。フェリクス、悪いがちつと研究所に連絡してもらえるか？」

「ハッ、すぐに行ってきます！」

——そうして、あれよあれよという間に、ガゼルとフェリクスは、この魔法薬を手配した先に連絡してくれた。

なお、この魔法薬は、ガゼルとフェリクスの伝手で、リッツハイム市にある国立魔法薬研究所から取り寄せたものだ。

姿を変える魔法薬は通常、市場には出回っていない。犯罪に悪用されたら大変だしね。

当然、一般人が研究所から魔法薬を購入することもできない。

だが、今回はガゼルとフェリクスが黒翼騎士団の団長と副団長であり、その立場と現在までの実績を鑑みて、魔法薬を特別に卸していただけになったそう……だけれど……

「——届ける薬を間違えた、だと!？」

連絡を受けて、我が家にすつとんできた国立魔法薬研究所のお偉いさん。

そのお方が、ペコペコと頭を下げて説明した内容は、なんとも単純明快なものであった。

「も、申し訳ございません！　うちの職員のミスでご迷惑をおかけし、なんとお詫びをしたらいいか……！」

なんでも、今回、研究所では二種類の魔法薬を調合していたのだという。

ガゼルとフェリクスが頼んでいた『髪と目の色が変わる魔法薬』と、別の人物が頼んでいた『一時的に若返りをする魔法薬』である。

だが、どうやらその魔法薬の宛先が、途中で入れ変わっていたらしい。

先方も届いてすぐに魔法薬を服用したらしく、ちょうど同じタイミングで、研究所に問い合わせの連絡が来たそう。

「ハア……まあ、詫びとか大層なモンはいらねえよ。こっちは正規の薬と、タクミの姿を元に戻すことができればいい。解除薬はあるんだろう？」

ガゼルは大きくため息をつき、肩をすくめる。

だが、対する研究所のお偉いさんは、何故かそこで黙りこくってしまった。

「……おい、どうした？　なにを黙ってんだよ」

「そ、それが、そうですね……」

研究所のお偉いさんは、額に浮かぶ汗をハンカチで拭いながら、しどろもどろに説明を続けた。

「新たな魔法薬も、その解除薬も、材料がとても希少なものでして……それを調合する時間も一日

や二日とはいかないものでして……」

「……おい、じゃあまさか……」

「も……申し訳ございません！　じ、実は、私がここに来る前にもう一方のお客様にすでに正しい薬と『解除薬』を引き渡してしましまして……！　『解除薬』はそれで最後となりました！　そして、『目と髪の色を変える魔法薬』も、今から調合するとなると最低でも十日はかかってしまいます……！　申し訳ございません！」

がばりと床に這いつくばるようにして謝る研究所のお偉いさん。

その姿に、ガゼルは一瞬呆気にとられたようだったが、次の瞬間、驚くほど冷めた視線を向けた。「——すると、じゃあなにか？　とどのつまり、こっちが依頼してた薬は用意できねえし、タクミの姿を元に戻すこともできねえ。自然に魔法薬の効果が切れるのを待てと……そういうことか？」

「つ……お、仰る通りでございます、本当に申し訳ございません……」

床の上で小さくなって、ぶるぶると震え出したお偉いさん。

おれは居た堪れなくなり慌ててガゼルに視線を向けるも、彼が気付く様子はない。

そのため、今度は、傍らに立つフェリクスを見上げて助けを求める。

しかし、フェリクスはガゼル以上の絶対零度の眼差しで、お偉いさんを見下ろしていた。

「……呆れました。どんな良薬であっても、扱う人間が愚鈍であれば毒に変じるといふ諺を聞いたことがあります、まさしくその見本のようなですね」

「も、申し訳ございません……」

お、お偉いさんがとうとう、申し訳ございませんとしか喋らなくなってしまった！
少し迷ったあと、おれはガゼルとフェリクスの怒りを宥めるべく声をかけた。

「ガゼルもフェリクスも、そんなに怒らないでやってくれ。再発防止に努めてくれるなら、おれは構わないから」

「タクミ……でもよ、お前だってあんなに旅行を楽しみにしてたじゃねエか」

ん？ もちろん、明日からの旅行はめっちゃくちゃ楽しみですよ？

ガゼルだってそうじゃないの？

それなのに、なんでガゼルはまるで明日の旅行が中止になったかのような口ぶりなんだろう。

「もちろん楽しみだぞ。まあ、かなりイレギュラーな要素が加わったが……まあ、この姿なら、大人の時よりも注目されにくいんじゃないかと思うし」

「え。お前、その姿で行く気なのかよ？」

「そうだ。正しい薬ができるまで十日もかかるんだろう？ せっかく都合をつけて三人の休みを確保したんだ。次の機会がいつになるか分からないし、こんなことで中止にするのはもったいないだろう」

「いや、『こんなこと』って……かなりとんでもない状況だと思うんだが」

まあ、確かにこんな姿になった当初は、おれもビックリだったけれど……でも、これでせっかくの旅行を中止するのはいやだしさー。

それに、大人の姿のおれが旅行先で「わーいわーい！」とはしゃいでたら、かなり悪目立ちする

だろうけど、この姿ならそんなに目立たないんじゃないかな？ つまり心置きなく楽しめるってわけだ。

「どのみち、これから旅行に行くたびに、ガゼルとフェリクスに魔法薬を手配してもらうわけにはいかないと思っていたんだ。なら、これもいい経験だと思って、次回への試金石にしようじゃないか」

「……はあ。タクミがそこまで言うなら、しょうがねエな」

ガゼルは苦笑いを浮かべた。

どうやら、お偉いさんへのお叱りもこれで終わらせてくれるようだ。

ついで、おれはフェリクスを見上げた。彼もまた、おれと目線が合うと「タクミがそう仰るなら、仕方がないですね」と微笑を浮かべた。

フェリクスも怒りをおさめてくれたのかと思ったが、しかし、彼はすぐに冷たい視線をお偉いさんに向けた。

「ですが——今回の件は、我々の私的な用事であったからいいものの、これが騎士団の任務などに関わることであればかなりの問題でしたよ。努々、今後はこういったミスをおこさないようにしてください。くれぐれも、タクミの優しさに甘えることのないように」

「あ……ありがとうございます！ タクミ様も、本当にありがとうございます！ もちろん、今後はこういったことが決まらないようにいたします！」

ほっとしたように顔を上げたお偉いさんは、涙を流してガゼルとフェリクス、おれに向かってペ

コペコと頭を下げ続けた。

なんだかまるで、命乞いを聞き入れてもらったかのような表情である。いや、でも彼の胸中はそれに近いのかもしれない。

さっきのガゼルとフェリクス、怖かったもんなあ……

ま、なにはともあれ、せっかくの旅行が中止にならなくてよかった。

あとは旅行鞆の準備を……あつ!?

そういえば、今気付いたけれど……おれ、身体が小さくなってるから、着替えが一枚もないじゃん!?

こ、こうしている場合じゃない!

今から買いに行かないとー!?



「しゅ、出発前から疲れたなあ……」

ベッドにどざりと身体を投げ出す。

元から余裕のあるキングサイズベッドだが、今は身体が縮んでいる分、いつそう広く感じる。ごろごろと試みにシーツの上で転がっても、まだまだ端まで遠い。

「おお……いつもよりベッドが広いと、すごいお得感だな!」

思わず大の字になる。首だけ起こして、部屋の中を見渡すと、家具や調度品もいつもより大きく感じる。

見慣れた景色のはずなのに、なんだかワクワクしちゃうなあ、こういうの!

「それにしても、フェリクスのお母さんが服を貸してくれて助かったなあ」

今着ているパジャマも、そして旅行鞆に詰めた服も明日着る予定の服も、フェリクスのお母さんが貸してくれたものだ。

あのあと、フェリクスが実家であるアルファレッタ伯爵家に連絡を入れて事情を説明したところ、フェリクスのお母さんが「フェリクスや、フェリクスの兄二人の昔の洋服があるから、取りに来るといいわ」と言ってくれたのである。

とはいえ、家族の思い出として残しているのなら、おれなんかは拝借しては悪い。

最初にご遠慮させていただいたのだが、フェリクスのお母さんいわく「タクミくんはフェリクスの家族なんだから、私にとっても家族よ。何も遠慮することなんかないのよ」と言ってくれた。そこまで仰おこっていただけならと、ありがたくお借りしたわけである。だが……

「……こんなにたくさん服を試着したのは、おれの人生で初めてだな……」

『若返り薬』によって縮んだおれを迎え入れてくれた、フェリクスのお母さんこと、アルファレッタ伯爵夫人。

彼女は若返ったおれのことを見るなり、らんらんと目を輝かせた。思わず、恐怖を感じて後ずさりしてしまうような眼光だった。

そして、彼女はおれの手を掴むと、あれよあれよという間に、用意していた色んな服を着せ始めたのである。

途中、視線でガゼルとフェリクスに助けを求めたが、二人は二人で、

『——お、こっちの服なんか似合うんじゃないかね？』

『確かにタクミには似合いますが……あまり彼の魅力を引き立てすぎると、悪い虫に目をつけられないかが心配です』

『ああ、それもそうだな。一応、獲物は持っていくとはいえ、タクミのあの小ささじゃ戦闘も勝手が違うだろうしなア……なら、こっちの服はどうだ？』

『いいですね。では、それとこちらのフードつきの上着をあわせて……』

なんて会話をしていた、全然おれの救援に来てくれなかった。

二人とも、今日も仲がいいですね！　さすが我が黒翼騎士団の団長と副団長だけあります！　でも、おれのことにも気にかけてくれると嬉しかったな！

「……本当に大変だった……興奮したフェリクスのお母さんに、なんか女の子用のドレスみたいなとか、ワンピースみたいなまで着せられたしな……」

っていうか、アルファレッタ伯爵家は三兄弟のはずなのに、なんであんな服があったの？

……まさかフェリクス、今のおれと同じくらいの年の時に、ああいう服を着せられていたんだろ
うか？

しまったな……もつと伯爵夫人にそこらへんの説明を求めておけばよかったかもしれない。

フェリクスのマル秘おもしろエピソードが聞けたかもしれないのに、惜しいことをした。

そんなことを考えていたら、部屋の扉をノックする音が響いた。

「——タクミ、今大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

慌てて飛び起き、髪を整えてから返事をする。扉を開けて、部屋に入ってきたのはガゼルだった。

「風呂、入るだろ？　準備ができたから呼びに来たぜ」

そこでおれはちよつと首を傾げる。

いつもなら、お風呂の準備ができた時に呼びに来るのは、使用人さんの誰かなのに。

時間が遅い時は彼らも離れに戻るけれど、今はまだそんな時間じゃない。

「分かった、ありがとう。でも、ガゼルが呼びに来るなんて珍しいな」

「いや、なにか困っていることはねえかなと思ってよ。その姿じゃ旅行の支度も一苦労だっただろ？」
どうやらガゼルは心配してくれらしい。

おれは胸を張って答えた。

「大丈夫だ、前から準備はしておいたからな。服も入れ替え終えたし、忘れ物もない」

ハンカチも、歯磨きも歯ブラシも、雨具も身分証明書も持った。

お金は三つに分けて、旅行鞆と携帯用の鞆のそれぞれに分散してしまっている。バッチリだぜ！
しかし、扉の前に立ったままのガゼルは、いささか顔色が優れない。

不思議に思っただけを見上げるも、いつもよりかなり背が低くなっているせいで、なかなか視線

が合わない。今のおれは、ちょうど目がガゼルのお腹辺りにくるぐらいの身長なのだ。

そんなおれに気付いたのか、ガゼルは腰を落としてくれた。

おかげで、ようやく彼と視線が合うようになる。

「今回のこと……悪かったな。まさかこんなことになるなんてよ」

突然告げられた謝罪の言葉に、おれはきょとんと目を丸くする。

対して、膝をついたガゼルは、悔しげな表情をしていた。

「お前に心置きなく旅を楽しんでほしいと思ったんだが、裏目に出ちまったな。こんな結果になつてすまねエ」

「別に、ガゼルが謝ることじゃないだろ。菓の取り違えなんて、誰も予想できないし、飲まなければ分からないことなんだから」

慌てておれは首を横に振った。

ガゼルはちつとも悪くないのに、そんな顔されちゃうと、おれが困るよ！

困るというか、悲しいというか！

っていうか、さっきまでおれなんか「わゝ、いつもより部屋が広く感じてお得だなあ☆」なんてのんきなことを考えてたくらいなんで……じ、自分の能天気っぷりがちよつと恥ずかしいぜ！

「そんな顔をしないでくれ、ガゼル。おれは今回の件はそこまで気にしてないんだ。そもそも、ガゼルのせいだと思ったことなんて一度もない」

「タクミ……」

「それとも……ガゼルは今のおれは嫌いかな？」

そう尋ねると、ガゼルが顔を上げた。そして、首を強く横に振ると、その両腕を伸ばしておれの背中に回してくる。

いつもよりも小さくなっているせいで、おれの身体はガゼルの両腕にすっぽりと抱きこまれてしまふ。

元の姿との違いをガゼルも感じたらしく、ぽつりと「小せえなア」と呟いた。

「悪い、嫌なわけじゃねエんだ。ただ、今のお前はあんまりちつこいからよ……いつも以上に心配になるんだよ」

「ガゼル……」

「約束してくれよ、タクミ。旅先では絶対に俺やフェリクスの傍から離れるんじゃないやねエぞ、分かったな？」

「ああ、約束する」

こくりと頷く。

うんうん。無論、おれは言われずとも最初からそのつもりだったぜ！

なにせ、おれはリッツハイム市内ですら、いまだに迷子になったりするからね！

身体が縮もうが縮むまいが、ガゼルたちの傍から離れるつもりはないから安心してほしい。

「約束するから、お願いだからそんな顔はしないでくれ。せっかくの旅行なのに、ガゼルにそんなに悲しそうな顔をされると……寂しくなる」

おれがそう言うのと、ガゼルがハッとした表情になった。
そして、きまりが悪そうな笑みを浮かべる。

「そう……だな。悪い、タクミに謝りに来たつもりだったのによ、逆に不安にさせちゃったな」
ようやく気を取り直してくれたガゼルに、おれはホッとして笑みを向けた。

「いいんだ、ガゼルが心配してくれた気持ち嬉しいから。ただこうなってしまったものはもう仕方がないから、おれはどうせならこの状況を楽しもうと思ってる。だから、ガゼルも同じ気持ちでいてくれると嬉しい」

「楽しむ？」

「普段とは違うものの見え方ができて、なかなか楽しいぞ。ベッドも広いし。それに、ガゼルのこともいつもより大きく感じるし」

両腕を伸ばし、ガゼルの首に回してぎゅっと抱きついてみる。

こうしているだけでも、ガゼルの肩や首回りの厚み、身体についた筋肉のしなやかさを、今まで以上に感じるのだ。

いつもより小さくなった掌で、ガゼルの頭に触れて、わしゃわしゃとワインレッドの髪を弄っている、ガゼルが吐息を零した。

「ガゼル？」

「……っ。ほんと、お前つて奴は……本当に分かってんのかねエ。タクミのそういう無自覚なところが、俺は一番心配なんだがな」

「……なにか、おれは間違えていたか？」

「いや、そんなことはねエよ。……そうだな、確かにこんなにウジウジ悩んでるのは俺らしくねエな。よし！　そうと決まれば、俺も今のタクミをたっぷり堪能させてもらうか！」

「うわっ!？」

突然、身体がふわりと宙に浮いた。

見れば、ガゼルが両腕でおれを抱っこしている。慌ててぎゅっと首筋に掴まると、ガゼルはおかしそうに笑った。

い、いやいや、ガゼルさん!?　た、堪能するつてなに？

今、おれたちはどこに向かっているんですかね!?

「ちよっ、ガゼルっ。どこに向かっているんだ？」

「なに言ってるんだよ。最初に、風呂の支度ができたって呼びに来ただろ？　そんな小せエ姿じゃ心配だからな、一緒に入ってやるよ」

ファッ!?

いやいや、一緒にお風呂つて!?

べ、別におれ、身体が縮んだだけで、精神的には何も変わってないんだから、心配してもらうことなんて何もないけど!?

っていうか、なんか、前にもこんなことあったような……!?

「おや、ガゼル団長。タクミを抱えてどうかしたのですか？」

ガゼルの逞しい腕に抱き上げられて運ばれていると、廊下の向かいから、フェリクスがやってきた。

おれとガゼルを見て、不思議そうな顔をしている。

彼はお風呂から上がったばかりのようで、身体からまだ湯気が立ち上っていた。

ああ、なるほど。フェリクスが風呂から上がったから、ガゼルはおれを呼びに来てくれたのか。

「おう、フェリクス。これから風呂に入ってくる」

「え？ ガゼル団長とタクミは一緒にいるおつもりなのですか？」

「ああ、ちょうどさっき、タクミから『せっかくならこの状況を楽しんでくれ』って言ってもらえてよ。だから、この機会に小せえタクミを堪能させてもらおうかと」

「それは……」

フェリクスが眉間に皺を寄せて顔をしかめた。

うん、こうなればフェリクスが頼みの綱だ！ 「身体が縮んだとはいえ、タクミはもう立派な大人ですから、そんなに甘やかす必要はないのでは？」とかなんとかガゼルに言ってくれ！

「それは、ガゼル団長とタクミのお二人だけで……ということですか？」

「ああ。悪いが、今回は俺に譲ってくれ。その代わり、風呂から上がったあとにタクミはお前の部屋に行かせるからよ」

「承知いたしました。そういうことならばかまいません」

承知しないで、フェリクス！

っていうか、なにがどう承知できたの!? おれは何も理解できてないよ!?

なんで今、おれの意思がまるっと反映されてない状態で、おれがフェリクスの部屋に行くことが決めたの!?

しかし、フェリクスは嬉しそうな笑顔で「では、タクミ、また後ほど。お待ちしていますから」と告げてきた。

おれはウツと言葉に詰まる。

こ、こんなにキラキラした笑顔のフェリクスに、ノーとは言いつらい……!

「あ、ああ……またあとでな、フェリクス」

残念ながら、フェリクスはおれの助けにはなってくれなかった。

なってくれなかったどころか、おれは風呂から上がったらフェリクスの部屋に行くと約束させられてしまった。マジでなんだ。

そして、おれはガゼルに抱かれたまま、風呂場に向かう羽目になったのだった……



「……こうして見ると、本当にこの屋敷の風呂は広いな」

ガゼルになかば押し切られるようにして、とうとう風呂場にまで連れてこられてしまった。しかし、身体が縮んでしみじみと思うが、本当にこの屋敷のお風呂は大きくて豪華だ。

精緻な模様の描かれたタイルで壁は覆われ、真っ白なバスタブが床に下半分を埋め込まれるようにして設置されている。バスタブはかなり大きな造りで、大人五人は入っても余裕があるんじゃないだろうか。

そのため、今のおれにとっては、風呂場もバスタブもともなく広く感じる。

正直、ガゼルと一緒に入っていなかったら、はしゃいでバスタブの中で泳いでたかも。

「タクミ、どうかしたのか？」

風呂場の広さに改めて感じ入っていると、ガゼルが顔を覗き込んできた。

むろん、これから風呂に入るのだから、ガゼルも一糸まとわぬ姿だ。

よく日に焼けた肌の上には、引きつれた火傷のような痕や、切り傷があちこちにあるが、それが彼の魅力を損なうことはまったくくない。

むしろ、ガゼルの引き締まった身体を引き立たせており、同性ながら惚れ惚れしてしまう。

「いや、なんでもない。これから洗う」

「じゃあ俺が洗ってやるよ。こっち来い」

「……ガゼル。念のため言っておくが、おれは中身はおれのままだぞ？ 精神まで若返ったわけじゃないからな」

おれが腰に手を当てる抗議をすると、ガゼルは悪びれない表情で、そして、どこか懐かしそうに瞳を細めて微笑んだ。

「なんだよ、怒ったのか？ 悪い悪い。今のタクミはちっこくてよ、つい、あれこれ世話を焼きた

くなっちゃうんだよな」

「いや、だからおれは精神まで若返ってるわけじゃ……」

「昔、元々住んでいた農村からリッツハイム市に移り住んでは、俺がずっと小さいガキ共の面倒を見てたんだよ。そんな時のことを思い出して、なんか懐かしくなっちゃってな」

「……そ、そうか」

ちよ、ちよとガゼルさん？ そう言われると、断りづらいんですけど！
っていうか、その言葉のあとで断ったら、おれがめちゃくちゃ酷い奴じゃない！

——ガゼルは、今でこそリッツハイムの国立騎士団である黒翼騎士団の団長を務める益荒男だが、最初からそうだったわけじゃない。

彼は貴族でも騎士の出でもなんでもなく、もともとは農村で暮らす庶民だった。

しかし、子どもの頃にモンスター襲撃に遭い、家族も村も失った。

そして、生き残ったわずかな村人だけでこのリッツハイム市に逃げてきたのだ。頼るべき大人もおらず、まだ自分も子どもの身であるのに、幼い子どもたちの面倒を見ながら、仲間と助け合って生きてきた——という話を、以前、おれはガゼル自身の口から教えてもらった。

そこから黒翼騎士団の団長まで上りつめたのだから、本当にすごい人だと思う。

……つまり、ガゼルの『小さいガキ共の面倒を見てた』っていう話は、その時のことであるわけ
で……

そ、そんなことを、そんな懐かしそうな顔で言われたら、もうそんなの絶対断れないやつじゃ

んー！

「……今回だけだぞ」

やれやれ、とガゼルの傍に寄る。

まったくもう！　そもそも、おれがガゼルからの頼み事を断れるわけないんだよー。

それに、さっき、おれ自身がガゼルに『せっかくだし、この状況も楽しんでほしい』みたいなこと
と言っちゃったばかりだしねえ……ま、いいか！

せっかく明日からは旅行なんだから、こんなことでガゼルとケンカしたくないし。

「おう！　ありがとな、タクミ」

おれの言葉に、破顔するガゼル。

……その笑顔を見て、「こんなに喜んでくれるなら、これぐらいはいつか」と思ってしまったの
だから、おれはつくづく単純な人間だ。

「じゃあ、こっち座ってくれ、タクミ」

「ああ、分かった」

ガゼルに促され、彼の正面の椅子に座る。

ちなみにこの椅子は、おれのたつての希望で設置してもらった。元々はガゼルもフェリクス
も……というか、この世界の人間は身体を洗う時は、立って洗うのが常なので風呂場に椅子を置く
習慣はない。

騎士団の共同浴場とかも、隣との間に仕切りはあるものの、皆ブースごとに立って身体を洗う

感じ。

しかし、日本人であるおれはその習慣に馴染めなかったので、我が家のお風呂にはこの椅子を設
置してもらった。

さすがにプラスチック製とはいかず、木製である。なので、バスタブや周囲の西洋的装飾と比べ
ると、この椅子だけなんとも昭和の銭湯感を醸し出している。

ま、細かいことはいいんだよ！

ガゼルとフェリクスも「立って洗うよりも椅子があるほうが便利だな」「確かに、座っている
ほうがゆっくりと洗うことができますし、隣の方にも飛沫がかかりませんね」って言ってくれた
しね！

そんな経緯で作られた椅子に座ると、背後にガゼルが回った。彼もまた風呂用の椅子に座って
いる。

ガゼルは木製の盥——これもおれが言ってこの風呂場に備え付けてもらったもの——にぬるま湯
をためると、それをゆっくりとおれの頭にかけた。

髪の毛を充分に濡らしたところで、頭用の石鹸を掌の中で泡立て、その泡をおれの頭頂部につ
ける。そして、頭皮を揉みこむようにマッサージを始めた。

「タクミ、大丈夫か？　石鹸が目に入ったら言えよ」

「全然大丈夫だ。むしろ、気持ちいい」

念のため目をぎゅっとつぶっているものの、石鹸が顔に垂れてくる気配はない。

ガゼル、うまいなあ。

彼がおれの頭を撫でる時は、いつもこう、わしゃわしゃーって大雑把な感じだから、ちよつと意外だ。

やっぱり、昔、自分より幼い子の面倒を見ていた経験があるからだろう。

ガゼルの新たな一面を発見しちゃったかも。

「流すから、目をつぶってろよ」

「うん」

おれが答えると、一拍の間を置いてから、頭からぬるま湯がかけられた。

指先で目の辺りについた湯を拭っていると、背後のガゼルから「悪い、目に入ったか？」と気遣わしげな声がかけられた。おれは首を横に振って、大丈夫だと答える。

「ならよかった。じゃあ、今度は身体だな」

「え？ い、いや、別にそれぐらいは自分で……んっ」

おれが言い終わる前に、背中をやわらかく擦るものがあつた。

ガゼルはいつの間にか手に綿布を持っており、石鹸をつけたそれで背中を擦ってくれている。擦るといつても、あまり力は込められていないので、ちよつとくすぐったいぐらいだ。

「今のタクミは、本当にちいせエし、細いなア。そういう今日、伯爵夫人に着せられてたエプロンドレスもずいぶんと似合ってたぜ？」

「頼むから、あれは忘れてくれ……」

「なア、元の姿に戻ったら、もう一回くらいあの格好してみてくれよ。お前なら絶対、元の姿でも似合うからよ」

「ぜ、絶対にいやだ！ この姿でもかなり恥ずかしかったけれど、アルファレッタ伯爵夫人の頼みだから仕方がなく着たんだぞ。元の姿でなんて、絶対に着ないからな」

「なんだよ、伯爵夫人からの頼みは聞くのに、俺の頼みは聞けねエってのか？ つれねエな」

ガゼルはククツと喉を鳴らし、悪戯めいた表情で笑った。

そんな会話をしている間に、背中洗い終わつたらしい。ガゼルの手が今度は前面に伸びてくる。おれは慌てた。背中を洗ってもらつたところで、椅子から立ち上がってあとは自分でやるつもりだつたのに、会話に気を取られてタイミングを見失つてしまった。

「っ、ガ、ガゼル、前はさすがに自分でやるぞ……？」

「まア、いいじゃねエか。せっかくだから、もうちょい小さいタクミを堪能させてくれよ」

そう言くと、ガゼルの手がぬるりと腹部に触れた。

あ、あれ？ ガゼル、布は持つてないのかな？

背中を洗ってくれた時は持つてたのに。

「っ……！」

おれの戸惑いをよそに、ガゼルの手がお腹のやわらかい肉をふにふにと弄るように触れてくる。先ほどの言葉通り、おれの変貌した身体の感触を確かめ、楽しんでるような触り方だった。そして、それを裏付けるように、人差し指の先がするりと臍に触れてくる。

石鹸をすりつけるように、臍へそのくぼみや、その周辺をぬるぬると指先で弄いじられると、くすぐったいような、ぞくぞくとする感覚が奔はった。

「っ、ふ……」

思わず熱い吐息が零れそうになるのを、前歯で自分の舌先を噛むことで、なんとか堪えた。

こ、これ……ガゼルは洗ってくれてる、だけなんだよな……？

ガゼルに抗議しようかとも思ったが、それを口にする、自分が快感を覚えていることを告白するようで、なんとも躊躇ためちわれた。

もしもガゼルにそんなつもりはなく、本当に洗ってくれてるだけだったら、目も当てられない。

しかし、そんなおれの胸中の焦りと戸惑いを知ってか知らずか、ガゼルの指が上部へと伸びてきた。

胸を這うガゼルの指は、先ほどと同様、その肉付きのやわらかさや弾力を確かめるように、ふにふにと触れてくる。

洗っているのか、楽しんでいるのか、いかんせん判別がつかない。

「っ、ガ、ガゼル、もう大丈夫だからそろそろ……あっ！」

「なに言ってるんだよ。まだこは洗い終わってねえだろ？」

石鹸を纏まとってぬるついたガゼルの指が胸の中央に滑り、乳首をつまんだ。

ぬめりを帯びた指先が、くにくにと乳首を弄いじってくる。その感覚に、思わず足の指がぴんと伸び、背中をくねらせてしまう。

「ッ、ガゼルっ……！ や、やっぱり、さつきからわざとやってるだろう！」

「あ、バレたか？ いや、だってよー、こんな小さいタクミを触る機会はそうそうねえと思ったら、色々と触ってみたくなっちゃってよ」

「だ、だからって、ここじゃなくても……ひあっ！」

ガゼルの指先が、きゅうつと乳首をつまみ、引っ張る。

いつもなら耐えられる快楽は、身体が縮んでいるせいで皮膚が薄くなっているのか、痛いぐらいの刺激となつて襲ってくる。

びくりと身体が跳ね、バランスを崩して椅子から崩れ落ちそうになる。だが、落ちる前にガゼルがおれの身体を片腕で抱きとめた。

「おっと。大丈夫か？」

「う、だ、大丈夫だ……それより、その、この体勢はさすがに……」

「まあまあ、もうちよつと楽しませてくれよ。最初はあまりのことに色々と心配になったが……こうしてみると、確かに、これも意外に悪くねえ状況だな。こんな小さいタクミを見られる日が来るなんて、思ってもみなかったしよ」

ガゼルはおれの身体を抱き寄せると、自分の膝の上に乗せた。今のおれは、ガゼルに背中を預けて膝の上に座っている状態だ。

っていうか、この体勢だと、おれの足は完全に宙に浮くんだな……

ガゼルのガタイがいいのもあるんだろうけど、あまりの体格差に今更ながら驚く。

「元の身体に比べると、こっちはまだまだ小ぶりだなア」
「あっ……!?」

ガゼルの指が、再び乳首に触れてきた。

石鹸を塗り込むように、きゅむきゅむと両方の乳首を指先で弄り続ける。

「あつ、ガゼル、それやだつて……! んっ、ふっ」

「でも、お前のここは嬉しそうに硬くなってきたぜ?」

「んっ、あ……! ふあつ、あつ!」

「そういや、今のタクミの身体を調教したら、元に戻った時にどうなるんだろなア。試しに、この可愛い胸で試してみるか? ん?」

「あつ、やつ……んあ、ああッ!」

今、なんだかガゼルが怖いことを言っていたような気がしたけれど、いかんせん、快楽に耐えるのに必死で、会話に意識を向けていられなかった。

ガゼルの指は会話の間にも、ぬるぬると乳輪を這い、くすぐり、かと思えば、元の身体の時比べて小ぶりなそこをグニグニと揉みしだく。

「ひっ……あ、ああッ!」

容赦ない責めに、ぶるぶると身体が震え出す。

そして、とうとう、ガゼルの指が乳首の上に引つ張るようにして、くつと上に摘まみ上げた時、おれは甲高い悲鳴を上げて、背筋をのけ反らせた。

「あ、ああッ、ああッ!」

目の前にチカチカと星が飛ぶ。ガクガクと身体全体が震える。

すると、ガゼルはおれの胸を弄っていた指を離し、両腕でおれの身体をしっかり抱きとめてくれた。

「おっと……なんだ、もういったのか? いつもより早エな。やつぱり、今の身体のほうが敏感なんだな」

「はっ……は、あ……」

「ほんつと、ずいぶんと可愛くなっちゃったなア。どこもかしこもやわらけエし、ふにふにしてるしよ。それに、こっちもかなり可愛いナリになっちゃって」

ガゼルの言葉に、自身の息子をちらりと見る。そこは勃起をして、緩く頭をもたげているものの、射精は迎えていない。

ガゼルの愛撫によって昂^{たかふ}らせられた身体は絶頂を迎えたが、射精をしているわけではないので、身体の熱はいまだに内側で燦^{もよほ}ったままだ。

下半身にこもるもどかしい熱に、まだガゼルの膝の上にいるというのに、思わず内腿を擦り合わせてしまう。

すると、そんなおれの様子に気付いたガゼルが、そつと耳に唇を寄せてきた。

「どうした、タクミ? なんだか物足りなさそうじゃねエか。ん?」

「っ! べ、別に、そういうわけじゃない」

「そうか？」

お見通し、といった声音でおかしそうに笑う。

ガゼルが笑うことで、彼の熱い吐息が耳にかかってくすぐったい。

けれど、なんとなく、後ろを振り向いてガゼルと顔を合わせるのが躊躇^{ためら}われた。

おれは俯^{うつむ}くと、小さくなった自分の身体を見つめる。

「ガゼルは、その……今のおれの姿のほうがいいか？」

「うん？」

「いや、その、別にたいしたことじゃないんだが。……でも、今の姿のほうが、伯爵夫人も可愛いつて言ってくれたし。今だって、ガゼルも、この身体のほうが敏感だとか、可愛いつて言うから……その……」

もしかして、皆、『今のおれ』の姿のほうがいいのかなあ、とか。

まあ、そりゃ元のおれなんて、黒髪黒目がちよつと珍しいだけの平凡な男でしかないわけだし。だから、どつちかと言えば、まだこの姿のほうが可愛げがあるのかな、と思いつて。

でも、この姿は期間限定なんだよね。研究所のお偉いさんいわく、十日間で魔法薬の効果が切れて自然に元の姿に戻ってしまうわけで……

そんな風に考えて俯^{うつむ}いていたら、おれの身体を抱く手の力が強くなった。

「ガゼル？」

「馬鹿言つてんじゃねエ、そんなことあるかよ。叶うなら、すぐにでも元のお前に戻ってほし

いと思つてるんだぜ」

思つてもみなかつたガゼルの言葉に、おれは目を見開いた。

ガゼルはおれをぎゅうと抱きしめたまま続ける。

「さつきも言つたが……今のお前は確かにちつこくて可愛いけどよ。でもその分、気を付けて触らねエと、うっかり壊しちまいそうで怖え」

「……その割には、さつき、だいぶ無体なことをされたような気が……」

「なに言つてんだよ、さつきはかなり手加減しただろ？ 正直に言えば、あと二度くらいはお前をイかせて泣かせたあとで、俺のもんを突っ込んでさらによがらせたいと思つてんだよ。でも、今のお前がそんなちつこいナリだから、自重してるんじゃないかねエか」

「元の姿の時でも、同じように自重してくれると嬉しいんだが？」

ま、まあ、確かによく考えれば、いつものガゼルと比べると、さつきのは大分我慢してくれてるな。

いつもなら、ああやつて一度イかされただけじゃ済まないもんな。その後は二度三度にわたつておれだけ先にイかされて……いや、今はこの話はよそう！ おれの精神衛生上よくない！

「まあ、自重の話はさておきだ。それになにより、俺は……」
そこでガゼルが言葉を切った。

おれはちよつと顔を上げると、恐る恐る後ろを振り返る。

すると、思つた以上にガゼルの顔が間近にあった。ガゼルは金色の瞳を細め、唇に笑みを浮かべ

ると、チュツと音を立てておれの頬にキスをした。

「んっ……ガゼル？」

「俺が惚れこんだタクミは、お人よしのなにどつか無鉄砲で、凛^{りん}としていくせにどつか抜ける……そんな男なんだ。今のお前は愛らしいがな、それでも、一番“可愛い”と思うのは、元の姿のタクミだぜ」

そう言つて、ガゼルは今度は優しく、おれの唇に自分の唇を重ねた。

自然と、おれも目をつぶって彼の優しいキスを受け入れる。

……そ、そっか。

ちよつと気恥ずかしいけど、ガゼルの気持ちがたまらなく嬉しい。

今日、アルファレッタ伯爵夫人から「可愛い可愛い」って言われて、ガゼルからも「可愛い」って言われたから、こっちの身体でいたほうがいいのかなって思ったりしたんだよね。

でも、ガゼルがこう言ってくれて、とても安心した。

やっぱり、ガゼルの言葉はおれを勇気づけてくれるし、安心させてくれるなあ……

こんなに魂までイケメンな男性が、よくおれなんかの恋人になってくれたものだと思つづく思う。ガゼルがおれを大切にしてくれるように……おれも彼のことを大切にしていこう。うん。



「ふう……」

風呂から上がったあと、脱衣所で、ガゼルはしゃがみこんでおれに目線を合わせ、バスタオルでゆつくりと丁寧に、おれの身体と髪の毛を拭いてくれる。

なんか、こんなに甲斐甲斐しくお世話をされると、見かけと同じように精神年齢まで下がってしまいそうぢよつと怖い。

こんなことじゃあいけないとは分かつてるんだけど……ガゼルが髪を拭いてくれる手つきはとても優しく。

あまりに心地よくて、そのままてんと頭を預けてしまう。

「おっ？　なんだよ、タクミ。ずいぶんと素直じゃねえか」

「……やつぱり、今の外見のせいかな。この身体だと、ガゼルに甘えるのも、そんなに照れ臭くないとか」

「あー……お前、俺たちと正式に結婚してずいぶん経つのに、まだ恥ずかしがるもんなア」

おれの頭からタオルを取り去り、指で髪に触れて、拭き具合を確かめるガゼル。

彼の骨ばったごつい指が、湿り気をおびた髪をゆつくりと梳^すいていく。その感触が気持ちいい。

「でも、俺はさっきも言った通りよ……元のお前に惚れ込んだんだぜ。今の姿のお前も愛らしいが……俺としちゃあ、元の姿のお前が、同じように甘えてきてくれたら一番嬉しい。それを覚えておいてくれよ？」

そう言つて、ガゼルは顔を寄せると、おれの唇を舌先でペロリと舐めた。

金色の瞳は優しい光を湛え、真っ直ぐにおれを見つめている。

その言葉と表情に、おれの顔はかっとなつて熱くなった。

「ぜ、善処する……」

「そりゃよかった。期待してるぜ？」

面白がるように笑ったガゼルは、身体を起こし、おれに下着と寝間着を手渡してくれた。

受け取ったおれは慌ててガゼルから距離を取って、それらを身に着ける。

とはいえ、今更距離を取っても、真っ赤になった顔はバツチリとガゼルに見られてしまっているのだ。

「そうだ。着替え終わったら、フェリクススの部屋に行けよ。さつき、約束しちまったからな」

「分かった。……でも、なんであんな約束をしたんだ？」

「そりゃ、俺だけが小さいタクミを独占したらフェリクスに悪いだろ？ タクミも『せっかくの機会なんだから、今のおれを心ゆくまで堪能してほしい』って言っただじゃねえか」

「そんな言い方は絶対にしてないぞ!？」

抗議、もといツツコミをすると、ガゼルは楽しそうに笑って、おれの頭をわしゃわしゃと撫でた。

「ま、今のは冗談だが、半分は本音だぜ？ フェリクススの奴だって、今回のことは俺と同様に病んでるからな」

「……そうなのか？」

「ああ。だから、タクミがよけりゃ、フェリクススのことも安心させてやってくれねえか。さつき

たいに言えば、アイツも安心して明日からの旅行を楽しめるからよ」

そう言われてしまうと、おれも嫌だとは言えない。

そもそも、フェリクススが心の奥で、今回の件について自分のせいだと思いついてるのなら、その気持ちを取り除いてあげたい。

繰り返すけど、今回の件はガゼルとフェリクスが悪いわけじゃない。それに、ガゼルの言う通り、

明日からはせっかくの楽しい旅行だしね！ その前に、フェリクススの気持ちを楽にしてあげたい。

「分かった。そういうことなら、フェリクスと話をしてくるよ」

「おう、任せたぜ」

ガゼルは最後に再び床に膝をつくと、おれの頬にキスをした。

おやすみのキスである。

ガゼルとフェリクスと正式に籍を入れて、この屋敷で三人で暮らすようになってからというもの、こういったスキンシップが増えた。

ここらへん、なんとも外国ナイズというか、なかなか日本人にはない感覚だよな。

気恥ずかしいけれど、おれも同様に、彼の頬にキスをお返しする。

「じゃあ、フェリクスのこと頼んだぜ」

「ああ。おやすみ、ガゼル」

おれは脱衣所を出て、廊下を真っ直ぐ歩き、階段を上ってフェリクススの部屋に向かった。

ガゼルは反対側、応接室のほうへと向かった。まだ明日の準備などがあるのかもしれない。それ

とも寝酒でも楽しむのだろうか。

さて。フェリックスの部屋は、二階にある六つの部屋のうち、東側の真ん中の部屋だ。おれの隣の部屋である。なお、おれの向かいの部屋がガゼルの部屋になっている。

「フェリックス、入ってもいいか？」

フェリックスの部屋のドアをノックして、声をかける。

すると、^{かんはつ}間髪をいれず、目の前の扉がガチャリと開いた。

おれは開けていないし、このドアが自動ドアというわけでもない。部屋の中にいる人物が、ドアを開けたのである。

「タクミ、お待ちしておりました」

につこりと微笑むフェリックスの表情は、薔薇の薔が一斉に^{ほろろ}綻んだように華やかだ。

彼が着ているのは、濃い色合いのナイトガウン一枚なのに、それでも白馬の王子様然とした雰囲気は損なわれていない。

うーん、これがイケメンパワーか。マジパネエ。

「どうぞ、こちらに」

彼はおれの手をそつと取ると、部屋の中央に置かれたソファに導いた。

フェリックスの個室はダークブラウンを基調としており、ソファやカーテン、壁際に置かれた執務机などの主だった家具は、すべて同じ色で統一されている。

壁紙は白で、これだけだとなんとも味気ない部屋になりそうなどころだが、室内に敷かれた^{じゅうたん}絨毯

や、ソファに置かれたクッションが、濃緑色の花柄アラベスク模様のものに揃えられているため、落ち着いた雰囲気ながらも、ちよつとした遊び心を感じさせる。

なんともフェリックスのセンスのよさが発揮されている部屋なのだ。

中央のソファに腰かけると、おれのすぐ隣にフェリックスが腰を下ろした。

だが、いまだに手は握られたままだ。

「……ずいぶんと、タクミの手は小さくなってしまいましたね」

おれの手をにぎにぎしながら、フェリックスがぼつりと呟く。

どこか悲しげな様子の彼に、おれはガゼルに言われたことをハツと思い出し、慌てて唇を開いた。「フェリックス。昼間にも言ったが、もう一度言っておく。今回のことは、ガゼルやフェリックスのせいじゃないんだから、二人が責任や罪悪感を感じる必要はまったくないからな」

「タクミ……」

「おれは今回のことは全然気にしてないんだ。もしもフェリックスが今回の件を気に病んでるなら、おれは大丈夫だから、安心してほしい。誰しも、人生に一度くらいはこんなこともあるさ」

「……大抵の人間は、こんな事態は一度も経験しないまま人生を終えると思います……いえ、ありがとうございます。タクミは、私を元気づけてくれているのですね」

くすりと笑ったフェリックスが、再びおれの手をぎゅつと握った。

「そうですね。明日からはせっかくの新婚旅行なのですし、ずっと暗い気持ちでいてはもったいないですね。タクミに心配をさせてしまうのは、私の本意ではありませんし……気持ち切り替えよ

うと思います」

「ああ。まあ、この姿も悪くはないさ。旅行先ではしゃいでもいいけど、子どもの姿ならそこまで注目されないだろうし……アルファレッタ伯爵夫人にも、喜んでもらえたしな」

すると、ふと、フェリクスの手力が緩んだ。

見れば、彼の頬はちよつとピンク色に染まっている。

「その節は……母が大変ご迷惑をおかけしました……」

「い、いや、大丈夫だ。むしろ、あんなに服を貸してもらえて助かったよ」

服だつてタダじゃないんだから、新しく買うのはもったいない。

魔法薬の効果が切れたら、もう着れなくなっちゃうんだもんね。

二日や三日だったら買つてもいいけれど、さすがに十日間分ともなると……あ、でも下着は新しいものを買つたけどね！

だから、今回、アルファレッタ伯爵夫人からあんなにたくさん洋服を貸していただけて、すごく助かった。

というか、むしろ貸していただいた洋服が大量すぎて、「これ、十日分の量じゃなくない？」と思つたけれどね！

「……その、身内の恥ついでに、叶うならば、私もタクミにお願いをしたいことがあるのですが……」

「フェリクスが、おれに？」

フェリクスはコホンと咳ばらいをしたあと、じつとおれの顔を見つめてきた。

いつになく真剣な彼の表情に、おれも自然と背筋を伸ばして居住まいを直す。

ここにきて、フェリクスがおれに頼み事とは……いったいなんだろう？

ドキドキしながらフェリクスの顔を見つめ返す。

しばらく二人の間に沈黙が流れたあと、フェリクスはゆっくりと唇を開いた。

「……タクミ」

真剣な表情で名前を呼ばれ、思わずぐくりと唾を呑み込む。

い、いったいどんな深刻な話が始まるんだ……!!

「旅行が終わつて、リッツハイム市に戻ったら……肖像画家を呼んで、今のタクミの姿を描いてもらおうと思つているのですが、よろしいでしょうか？」

「……はい？」

え、今のおれの聞き間違い？

肖像画って……アレだよな？

小学校の音楽室に飾つてある、ベートーヴェンとかモーツァルトの顔を描いてある絵とか。おれ的には、そんなイメージなんだけど。

「しょ、肖像画というと……絵のことだよな？ おれの、絵ということか？」

「はい、そうです」

「えーつと……な、何故、そんなものを……？」